

駄洒落から大量殺人兵器まで

——ナボコフ『ワルツの発明』 訳者解説補遺

沼野 充義

2017年10月から刊行が始まった「ナボコフ・コレクション」（若島正・沼野充義監修、全5巻の予定、新潮社）は、ウラジーミル・ナボコフの前期「ロシア語時代」の作品を英訳からではなく、ロシア語の原典から新訳し、ロシア語作家としてのナボコフの姿を明らかにすることを大きな目標としている。2018年2月に出たその第2回配本『処刑への誘い 戯曲 事件 ワルツの発明』には、長編小説『処刑への誘い』の小西昌隆によるロシア語からの新訳（従来の富士川義之による英語からの翻訳は『断頭台への招待』1977年、集英社）に加えて、ナボコフが1930年代半ばから末にかけて、『処刑への誘い』の執筆・出版とほぼ同じ時期に書いた二編の戯曲『事件』（毛利公美訳、1938年初演）、『ワルツの発明』（沼野充義訳、1938年執筆）も収録された。これはどちらも本邦初訳であり、これまで日本ではまったく知られていなかった劇作家としてのナボコフの姿を初めて紹介するものである。

ナボコフと演劇というテーマ自体、日本ではほとんど論じられたことがない¹ため、本書には「ナボコフと演劇」と題して、やや詳しい解説を二人の訳者の共著によって付したが、限られた紙数では盛り込めなかった事柄も多い。特に『ワルツの発明』の訳者としては、この作品の翻訳を通して気づいた語学的・文学史的に興味深い点が多く、備忘録風に、訳者解説の補遺をここに掲載しておきたい。将来より本格的に調査・分析して論文に発展させるべき内容を含んでいるが、とりあえずはここに紹介する素材だけでも、ナボコフに関心を持つ日本の研究者には好奇心をそそられるものではないかと思う。

1 駄洒落

まだまったく知られていないナボコフの戯曲を初めて翻訳するにあたって、訳者として細心の注意を払ったのは、内容を正確に理解して再現するだけでなく、文体の特徴とそこから醸し出される作品全体の雰囲気伝えることだった。『ワルツの発明』は、荒唐無稽な発明をめぐる、常軌を逸した変人か狂人のようにも見える発明家を中心に展開する話なので、シリアスなSF風というよりは、不条理なドタバタ劇に近い。その雰囲気を強めているのが、ナボコフ一流の言葉遊びへの執着である。複雑なアリタレーションから複数言語間の pun に至るまで、ナボコフは様々な言葉遊びを駆使する作家だが（拙訳『賜物』河出書房新社、2010年、では、そういった側面について訳注で執拗なまでに解説を試みた）、小説の中では地の文に埋め込まれて目立たないこともあり、不注意な読者や訳者は気がつ

かないで終わってしまう場合もありそうだ。

しかし、戯曲の場合、すべてが口頭で発せられる科白のやりとりになるため、当然のことながら、登場人物が言葉遊びをすれば、それは常に前面に出てくる。しかし、今回の翻訳では、戯曲の科白に訳注を添えるのはあまりに野暮なことだと考え（いずれにせよ舞台のうえで俳優は訳注を読み上げるわけにもいかないのだから、戯曲の翻訳は、科白そのものの中で言葉遊びにどう対処するかで勝負するしかない）、訳注の数は最小限にとどめた。そのため、翻訳の読者はいったい原文でどんな言葉遊びが行われているのか、疑問に思うだろう。

例えば、第1幕、戯曲が始まったばかりのところで、いきなりこんな駄洒落のやりとりが行われる。

ワルツ でもやっぱり、大臣とサシで話したいんだな。

大佐 そういう厚かましいやり方には、サシつかえがありませんぞ。

ワルツ 駄洒落で驚かそうたってだめですよ。僕はダジャレブルクに工場を二つと、家賃収入がたくさんはってくるビルを持っているんだから。²

Министр. Но-но-но... вы можете говорить совершенно свободно в присутствии моего секретаря.

Вальс. И все-таки я предпочитаю говорить с вами с глазу на глаз.

Полковник. Нагло-с!

Вальс. Ну, каламбурами вы меня не удивите. У меня в Каламбурге две фабрики и доходный дом.³

この箇所「駄洒落」は単純で分かりやすい。ワルツが на глаз 「ナー・グラス」（一対一で、差し向かいで）というのに対して、大佐が「厚かましい」という形容詞に丁寧な口調の接尾辞「ス」をそえて Нагло-с 「ナーグラ・ス」と駄洒落で対応している。さらに、それを受けてワルツは、「駄洒落」を意味する каламбур カランブルから Каламбург 「カランブルク」という町の名前らしきものを即興で作り出しているのである。

『ワルツの発明』ではこんな風に、登場人物の多くが——大佐であろうと、ワルツであろうと——機会があれば科白に言葉遊びをはさむのだが、戯曲の中で、言葉遊びへの志向が際立っているのが「грах, грах, грах」と終始変な笑い声をあげるベルク将軍である（この笑いの擬声語はロシア語でも大変奇妙なもので、訳しようがないのだが、拙訳ではなるべくロシア語に近い音で「ゲラッ、ゲラッ、ゲラッ」とした）。

例えば第2幕で、この将軍は、誰かが持っているはずの報告書が行方不明になってしまったと判明したとき、「Плыл да сбыл.»（バビコフ 443 ページ）と言っているが、これはあえて直訳すれば「泳いでいて（流れていて）売りさばいた（始末した）」くらいの意味の

文章で、まったく意味不明である。しかし、これはじつは、「それまであったものが、跡形もなく消え失せた」ことを言う場合に使われるロシア語の慣用句 «Был да сплыл.» (主語が男性単数の場合)の子音の位置をわざと入れ替えて作ったナンセンスな言葉遊びであって、いわゆるスプーナリズム (語音転換) の好例と言えるだろう (byl da splyl → plyl da sbyl)。もちろん翻訳しようがないが、訳者としてはせめて同じくらい可笑しな効果を出そうと考えて、何日も考えた挙句の果てに、「あら不思議、どうして有らない、有ったもの」(新潮社版 387 ページ) としてみた。「有らない」という文法的に間違っただけの形は、村上春樹『騎士団長殺し』の騎士団長の言葉遣いから借りてきたものである。

ベルク將軍は第3幕でも、冗談を言っているのかと問うワルツに対して、「Нисколько. Румяную речь люблю, - есть грех, - но сейчас я серьезен.» と答えるが、ここにもまたある種の言葉遊びが含まれているようだ。直訳すれば「いえ、少しも。赤みを帯びた話は好きでして、それが欠点なんです、いまは真面目です」くらいになる科白だが、ここでは「話」を形容する「赤みを帯びた」румяный という形容詞の使い方が普通ではなく、意味がとれない。これは通常、紅潮した顔や頬について使う単語だからである。私は最初、「(若い女性の) 頬を紅潮させるような、艶っぽい」という仄めかしが含まれているかも知れないと想像したが、あれこれ考えて、これはもっと複雑な、いくつかの要素が複合した一種の言葉遊びではないかという結論に至った。まず、румяная речь「赤みを帯びた話」という表現は、確かにこれだけでは意味をなさないが、「красное словцо」という慣用句をもじったものと考えられる。красное は現代のロシア語では普通「赤い」を意味するので румяная の類義語になるが、この単語は古来「美しい、よい、(言葉遣いが) 優れた」という意味でより広く用いられ、красное словцо という表現も「(言葉巧みな) しゃれ、警句」の意味になる。ベルク將軍の「欠点」(やめられない悪癖) はもちろん、こちらのほうだろう。

ただし、それだけではない。この科白は、明らかに、プーシキン『エヴゲニー・オネーギン』の «Как уст румяных без улыбки/ Без грамматической ошибки/ Я русской речи не люблю.» 「微笑みを浮かべない赤い唇と同様、私は文法の間違いのないロシア語 (ロシア語の会話) が好きになれない」(第3章 28 連) という詩句を踏まえたものでもある。かくして、言葉遊びが好きなベルク將軍は (というよりはナボコフは、と言うべきだが)、単に洒落が好きだと言わずに、「美しい、赤い」を「紅潮した」にずらすことによって、『オネーギン』の詩句を想起させ、同時に若い女性のイメージをかすかに浮かび上がらせてもいる。この箇所の翻訳は、残念ながら上記のすべてを盛り込んだ訳文を作ることはできず、「いえ、これっぽっちも。確かにちょっと洒落のめすのも好きですが——それが欠点でしてね——いまは真面目です」(新潮社版 449 ページ) という、面白みのないものになってしまった。翻訳者の負けを潔く認めなければならない。

2 フォン・リッヒベルクの「アトミット」と『ワルツの発明』

すでに検討した「言葉遊び」とはまったく違った次元の問題だが、『ワルツの発明』の翻訳に取り組んでいるとき、訳者の頭をずっと離れなかったのは、ドイツの作家ハインツ・フォン・リッヒベルク (Heinz von Lichberg) の短編「アトミット」(Atomit) との関係、より正確に言えば、ナボコフは果たして「アトミット」を読んでいたのか、という問題である。

フォン・リッヒベルク (1890-1951。本名は Rudolf Gustav Ernst Heinz von Eschweiger ルドルフ・グスタフ・エルンスト・ハインツ・フォン・エッシュヴェーゲ) はいま読み返されるような価値のある著作のまったくないドイツの作家・ジャーナリストであって、しかもナチ党员でもあったので、文学史の墓場に葬られていた。ところが2005年にドイツの批評家ミヒャエル・マールなる人物が突如『ロリータとドイツの少尉』という本で、この作家を引っ張り出し、脚光を当てたのだった。この本は直ちに『二人のロリータ』という、一層センセーショナルなタイトルで英訳され、ナボコフに関心を持つ世界の読者たちに波紋を呼び起こした。⁴

フォン・リッヒベルクと『ロリータ』の関係が本題ではないのだが、前提としてまず簡単にマールの「発見」について紹介しておこう。マールは忘れられたこの作家が1916年に刊行した短編集『呪われたジョコンダ』⁵を発掘し、そこに「ロリータ」と題された短編があるのを発見した。ドイツ人の主人公がスペインはアリカンテのペンションで出会った魅力的なとても若い娘ロリータと数奇な恋に落ちるといって、一種のホフマンばりの幻想小説である。このロリータは宿の主人の娘だが、宿の奥の部屋には彼女に生き写しの肖像画があり、そちらのほうは100年も前の先祖の女性を描いたものだった。やはり名前をローラといったその女性は、ロリータと同様とても美しく、そのあまりの美貌に狂って彼女を争った二人の男たちに絞殺されてしまった。それ以来、この家には呪いがかかり、代々、女性は一人だけ娘を生んではすぐに狂気に陥って死んでいったという。

このように説明してみれば、ナボコフの作品とは似ても似つかないことは明らかだが、宿の主人の娘の名前がロリータで、しかもその彼女と下宿人が宿命的な恋をするという点は共通している。マールはこれは偶然ではなく、ナボコフはフォン・リッヒベルクの作品を読んでいたのではないかと様々な状況証拠を積み重ねて論証しようとするのである(ただし、剽窃だとか、「ぱくり」だとか主張しているわけではない)。ナボコフはドイツ語ができなかった、少なくとも文学作品を積極的に読めるレベルではなかったと一般には考えられているが、マールは、フォン・リッヒベルクの小説程度なら十分読めたのではないかと推測し、さらにベルリンに住んでいたフォン・リッヒベルクとナボコフの間には何らかの接点も実際にあったのではないかと想像を逞しくする。

マールのセンセーショナルな発見は、ナボコフ専門家の間ではほぼ黙殺されてきた。ドイツきってのナボコフ研究者ディーター・ツィマーだけが厳しい批判を書いて敢然と全面否定したが、その他の世界の主要なナボコフ研究者はそもそもマールの本を研究に値する

ものとは扱わず、無視してきた。実際、フォン・リッヒベルクの短編は（マールの『二人のロリータ』に英訳が掲載されており、私もそれで読んだだけでドイツ語の原文は入手していないが）、辻褄のあわない支離滅裂な通俗幻想小説といった風で、文学的水準から言ってナボコフとは比較にならない。このような作家がナボコフに「影響」を与えたと考えるのは、無理がある。

とはいうものの、「影響」という次元ではなく、ヒロインの名前や下宿の若い娘と下宿人の宿命的な恋という設定に関して、ナボコフがヒントを得たということはある得ないだろうか（ヒントを得たといっても、このような無名ドイツ作家の作品からヒロインの名前をわざわざ借用するのも、おかしな話ではあるのだが）。Lola から Lolita という愛称形を派生させるのは、スペイン語としては普通のことなので、Lolita という名前にしても珍しい形ではなく、偶然の一致ということはある得るだろう。

しかし、マールがさらに自説を補強するために重視するのは、『呪われたジョコンダ』の中に、もう一編、「アトミット」という短編が収められているという点であり、これはこれから紹介するように、『ワルツの発明』と驚くほど大きな共通点を持っている。「ロリータ」だけでなく、「アトミット」もあわせて考えると、これほどまでに偶然の一致が続くことは考えられない、ナボコフはやはりフォン・リッヒベルクを読んでいたのではないか、というのがマールの主張である。

「アトミット」⁶は、おおよそこんな話である。アメリカの「戦争省」に、ボビー・ケニソンという男が自分の発明を売り込みに来る。待合室には他にも発明を売り込みにきた人々がたくさんいたが、ボビーは1時間40分後には発明に関する省の責任者である高官の執務室に通される。そこで彼が披露したのは、アトミットという大量殺人兵器（というより化学物質か？——成分に関する科学的な説明はない）だった。わずか一グラムでも瞬時に拡散して、それを吸い込んだ数十万人が即死するというのである。その発明に興味を持った戦争省はさっそく翌朝、人里離れた荒野で、動物を使って実証実験を行うのだが……実験現場に突如高官夫人と令嬢が闖入することによって、実験はとんだ結末になる。

『ワルツの発明』の読者には、類似は明らかだろう。発明家が遠隔操作ができる大量殺人兵器をもって、軍事省ないしは戦争省に乗り込んできて、高官と面会する。ワルツが狂人ではないかと終始疑われたのと同様、ボビーは最初に「道化か病人」ではないかと、高官に言われてしまう（マール98ページ）が、実証実験によってその効力を実際に試すという点も共通している。さらにこの兵器によって、世界に戦争をしにかけて世界制覇するというよりは、「どんな戦争でも一日のうちに終わらせ」ること（「アトミット」マール98ページ）、または「地上のすべての火薬とすべての兵器を永遠に廃絶する」（『ワルツの発明』新潮社版413ページ）ことが目標として掲げられており、基本的に目指す方向も一致している。

これでも偶然で片付けられる類似だろうか？

マールはこれに加えて、もう一つ、自説の論拠として名前の類似を挙げている。『ワル

『ワルツの発明』の主人公の苗字は舞踏のワルツ（ロシア語では「ヴァリス」）を意味する、ロシア人にはもちろんあり得ない、少々変わったものなのだが、じつはフォン・リッヒベルクの短編「ロリータ」にもヴァルツァー（Walzer）という苗字の兄弟が登場する。ヴァルツァーはドイツ語で「ワルツ」の意味である。アロイスとアントンという名前の、双子ではないかと思われるほどよく似たヴァルツァー兄弟は、主人公が若いころ暮らしていた南ドイツの町で居酒屋を経営していたのである。一方、ナボコフのワルツも、天涯孤独の身のようなのだが、唯一信頼できる協力者で「親戚」がいるという設定になっている。この親戚は実際には登場せず、その苗字も明かされないが、親戚であるならば、同じワルツという苗字だという可能性もあるだろう。そうだとすると『ワルツの発明』にも二人のワルツがいることになる。はたしてこのような風変わりな苗字の一致まで、偶然で説明できるだろうか？

なお、ワルツという名前の用法については、もう一つ、興味深い点があることも指摘しておこう。『ワルツの発明』に少し先だって書かれた長編はタイトルを«Приглашение на казнь»（小西昌隆の新訳では『処刑への誘い』）と言うのだが、これら二編のタイトルを組み合わせると、「ワルツへの誘い」というフレーズができ、不思議とウェーバーの名曲「舞踏への勧誘」（Aufforderung zum Tanz）を思わせる。ウェーバーの曲のタイトルには「舞踏」（Tanz）とあるが、よく知られているように、この作品はウィンナ・ワルツの原点に位置するものとして有名である。

3 SFと大量殺人兵器

ミヒャエル・マールの推測するように、ナボコフは本当にフォン・リッヒベルクの「アトミット」を読んだことがあり、『ワルツの発明』を書く際に、その記憶が多少なりとも残っていたのだろうか？ いまのところ決定的な証拠はなく、ただ二つの作品のプロットが驚くほど似ているというテキスト上の事実があるだけである。

SFの歴史を改めてひもとくまでもなく、20世紀初頭、特に第一次世界大戦を経て、かつてないほどの大規模な殺傷能力を持つ兵器の開発が実際に進むとともに、世界に破滅をもたらすような軍事的活動がSFによってしばしばリアルに描かれるようになっていった。ナボコフは『ワルツの発明』において「遠爆」（テレモール）という、原爆を先取りするかのような兵器を1930年代の時点で構想したのは予言的（prophetic）⁷であったと、後に英語版の序文で誇らしげに振り返っているが、原爆のような未曾有の破壊力をもった兵器の実現可能性については、H・G・ウェルズがすでに1914年に『解放された世界』で詳しく描いている。ウェルズの小説では、1950年代、人類は世界戦争に突入し、原爆投下によって大惨事がひきおこされるに至る。原子炉の可能性や放射線の危険を予見した小説としては、チャペックの『中性子工場』（1922）も、先駆的な作品の一つである。

ロシア文学の文脈では、ヨーロッパ全体の破滅を陰鬱な想像力によって描き出したエレンブルクの名作『トラストDE——ヨーロッパ滅亡史』（1923）も忘れてはならないだろう。

この作品には原爆こそは出てこないものの、現代のICBMを思わせる「遠心力利用電気投擲砲」とか、細菌兵器、毒ガス兵器、危険な化学薬品など、破局の想像力を彩る現代的兵器が満載である。そして『ワルツの発明』に直結するかもしれないのは、マールの著書にも脚注で指摘がある通り（マール 68-69 ページ）、アレクセイ・トルストイの『技師ガーリンの双曲面』（1927）というSF長編小説だろう。この作品の主人公は、ロシア人のピョートル・ガーリン。未曾有の強力な破壊力を持った熱線を発生させる「双曲面」という装置を発明した技師である。今日のレーザーの先取りするものと言えるだろうか。『ワルツの発明』の「遠爆」（テレモール）も、二種類の光線の交差によって爆発を生じさせるという原理のようだから（新潮社版 357 ページ）、発想としては「双曲面」からさほど遠くない。トルストイの小説ではガーリンは、アメリカの大富豪・資本家と手を組み、この装置を使って競合するドイツの工場を壊滅させ、⁸さらには太平洋の無人島で地中深くに眠る金鉱を掘り出して、アメリカの産業界を牛耳り、独裁的支配者となっていくのだが、最後には、ソ連の刑事によって指揮された革命家集団によって双曲面が奪い取られ、ガーリンの独裁体制は潰えてしまう……。

手に汗握るようなストーリー展開の、エンターテインメント性豊かな娯楽作品であり、少なくとも当時ソ連では大きな話題となった。日本でもそれを受けて 1930 年に既にロシア語から全訳されている。⁹アレクセイ・トルストイはソ連体制を支持する「赤い貴族」として知られた人物で、当時のソ連文壇では最高の「セレブ」の一人だった。彼のことをナボコフは政治的にも文学的にもまったく許容できなかったはずだが、当時流行していたソ連の娯楽小説くらいは読んでいた可能性は充分ある。とはいえ、それが『ワルツの発明』への「影響」であるとか、執筆の直接のヒントになったとまでは言えないだろう。一つだけはっきりしているのは、『ワルツの発明』を書いたナボコフの文学的想像力は、このような作品が次々と書かれた時代の文学史的、そして歴史的な文脈の中にあっただということだ。もちろん作品を優れたものにするのは、その文脈を超え出るような独創性であり、それがアレクセイ・トルストイにはなかったけれども、ナボコフにはあったということではないか。

注

1. 唯一日本における例外的な先駆的研究として、毛利公美「描かれた『第四の壁』——ナボコフの戯曲『事件』」、『ロシア語ロシア文学研究』第 32 号（2000 年）、151-165 ページ、がある。またナボコフ戯曲研究の第一人者であるアンドレイ・バビコフ氏は 2010 年 3 月に来日した際、東京大学において「劇作家としてのナボコフ」という講演をロシア語で行っている（3 月 29 日）が、その講演原稿は日本語訳で、以下の論集に収録された——「劇作家ナボコフ」毛利公美訳、沼野充義・毛利公美・奈倉有里編『本郷の春——ウラジーミル・ナボコフと亡命ロシア作家たちをめぐる連続講義の記録』東京大学文学部現代文芸論・スラヴ文学研究室、2011 年、50-66 ページ。
2. ナボコフ『処刑への誘い 戯曲 事件 ワルツの発明』新潮社、2018 年、355 ページ。以下、本書からの引用は「新

潮社版」とのみ表示する。

3. Владимир Набоков, Трагедия господина Морна. Пьесы Лекции о драме. Составитель: Андрей Бабилов. -СПб.: «Азбука-классика», 2008, с. 426. (ウラジーミル・ナボコフ、アンドレイ・バビコフ編『モルン氏の悲劇 戯曲集 演劇講義』サンクトペテルブルク、アズブカ・クラシカ社、2008年)。以下、本書からの引用は「バビコフ」とのみ表示する。
4. Michael Maar, *Lolita und der deutsche Leutnant*. Frankfurt: Suhrkamp, 2005. Michael Maar, *The Two Lolitas*, trans. by Perry Anderson, London and New York: Verso, 2005. 以下、引用はこの英訳から行い、本文中には「マール」とのみ表示する。
5. Heinz von Lichberg, *Die verfluchte Gioconda*, Darmstadt: Falken-Verlag, 1916.
6. マール（英訳版）に掲載された英訳 "Atomite" (pp. 95-104) を参照した。ドイツ語原文は未見。
7. Vladimir Nabokov, *The Waltz Invention*, trans. by Dmitri Nabokov, New York: Phaedra, 1966.
8. ドイツの工場の爆破については、1921年9月21日、ドイツ南西部の地方都市オッパウで実際に起こった化学薬品工場の大爆発（いわゆる「オッパウ大爆発」）が作家の念頭にあったことも十分考えられる。これはBASFのアンモニア工場で起こった大爆発で、オッパウでは1000戸の建物のうち80%が破壊され、家を失った住民は7500人、死者500人以上、負傷者は約2000名にのぼった。ナボコフも当時ドイツに既に住んでいたから、この事件のことは当然知っていただろう。
9. アレクセイ・トルストイ『技師ガーリン』廣尾猛訳、内外社、1930年。